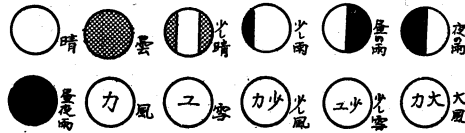


大森氏の気象記事

— 天保七、八年 —

遠藤二郎

昔の人でその時々^の気象を記したものは少くないが、大森氏のように特殊な記号を用いているものは極めて珍しい。それは丁度今日行われている天気記号の前駆ともいべき独創的なものであるので、ここにそれを紹介したい。



る。なお本書は数枚の封紙からなりその書名をいつしている。

図中の曇及び雨は原文ではそれぞれ薄墨、墨とつかい分けられている。更にこれらの記号の

傍に、その他の現象例えば雷、霰、霜、霧、地震、洪水等があればその旨が記され、またそれらの現象のあるものにはその強度時刻等まで付記されている。

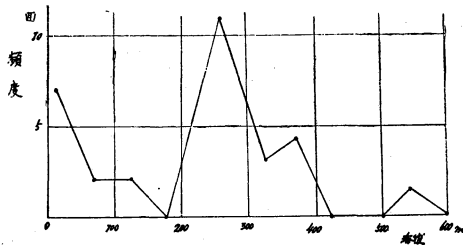
そして年末には年間の天気日数を挙げていること、即ち晴、曇、風、雪、雷、霰霜等に分類統計し、その他遠雨、遠雷、山岳冠雪、現象初日等に至るまで観測されていることである。

要するに氏は、毎日の気象を観測するばかりでなく、その記号を発案し、更に分類統計作業を加えるという現代的処理を当時すでに行っていたということは注目に値しよう。

終りに本史料の所在について御教示をいただいた板倉良氏並びに本文の御校閲をたまわった三宅所長に深く謝意を表します。(米子測候所)

先ず氏の略歴を述べると、氏は出雲国(島根県)大塚の村人で明和八年(西紀1771年)に生れ、幼名を弥市郎といい初め絵画を学び、後江戸に上り心学と医術を修めて帰国し医を開業し、元碩と称し後泰輔と改め剃髪して今日庵と号したが、別に不明堂、三樂、是空等とも号した、かつて大阪にも遊んだことがある、安政四年(西紀1857年)八十七才を以て歿し法名を不明堂是空三樂庵主という、著すところ三十余種類の多きに及んでいるが、中でも雷公解疑、地震論、世界四却之説等が注意をひく。

さて氏は天保七年(西紀1836年)のいわゆる申歳の飢饉を経験し、将来のいましめのために同年及び翌年の二か年間の毎日の天気^を次の如き記号を用いて記してい



第8図 北上山地北部の無霜地帯の高度の頻度
海拔200~300米の所に最も多い

非常に急速に減少する。この期間で収量が平均気温でなしに最低気温に支配されるということは、この期間で稲がいかに温度に対して敏感であるかを物語っている。

一方減数分裂期について同様の図(第5図)を作るとこの方は観測点がばらついて一義的な結果が出ない、このことは幼穂形成期は各個体でほとんど同時に起るが減数分裂期の方はバラバラに起る為であろうという。(新潟大学木戸教授の説)

2. 凶作と地形

凶作の分布に地形の影響が見られる、そのいちじるしい例は北上山地周辺である。第6図はその例で、北上山

地は南北に長い紡錘形をしているが、便宜上円形に押し縮めてある。図に示した同心円は200米毎の等高線を示す。凶作年について全県下平均反当収量を1とし、各村毎の反当収量を1に対する十分比で、1からの差を取り、すなわち1より大きい方を(+) 少ない方を(-)として表わした。更にこの図上で各村の位置を海拔高度と方位から求めて記入し、各村の位置に上記の各村の反当収量を記入して等値線画いた。

大勢としては海拔の高い所ほど収量が減っているが、精しく見ると、海拔200米内外の高さの所に収量が余り悪くない地帯がある。この地帯は北上山地をグルッと取巻いている。但し北東部分は高度が高くなっていて、海拔400米の辺りを通過している。

この方向は、凶作時に太平洋上から冷気を送ってくる「ヤマセ風」の流入口に当たっている。

このように北上山地を取り巻いて、「いわゆる暖帯 Warm belt」の存在するという事は他の現象からも裏付けされる。

その一つは、筆者の行った北上山地周辺の櫻の開花期

(6頁へつづく)